

### インドネシア・カリマンタンへのぶらり旅

ここ 10 年あまりの海外出張での仕事は中東・アフリカにかたより、アジア方面へはほとんどでかける機会をもたなかった。もうすこし、あまねく広くいろいろな国にでかけてみたいと願いつつも、シリア・パレスチナにそれぞれ 5 年・6 年、スーダンに 7 年(継続中)と、長期にわたる業務形態でどっぷり特定の国々にかかわってきた。

そんななか 2017 年 9 月 15 日から 9 月 23 日にかけて 9 日間の短期出張でインドネシアにでかけることになった。これは JIFPRO(公益財団法人 国際緑化推進センター)の案件で、テンカワン油のとれるフタバガキ科の樹木に関する利用状況と付加価値をつけた販売・マーケティング手法についてカリマンタン(ボルネオ島)での現地調査を実施するものであった。

調査チームはわたしのほか 3 人であったが、いずれも森林資源やインドネシアに経験豊富な方々であり、旅の車中での会話は楽しく、強行でタイトな日程ではあったが、毎日が気づきや学びの連続で有意義な旅になった。



板根化したテンカワン

さて、本調査の目的は、アブラヤシに代替する森林資源として、かつ住民にとっての現金収入源となるテンカワン油の利用と事業化の可能性を探るものであった。森林の民であるダヤック族へのインタビューや観察をとおして、コショウ・ゴム・焼畑稲作・家畜飼養などの生業形態、村々とテンカワン林の位置関係、住民によるテンカワンの位置づけ、オランダ人による搾油工場建設やその他の支援事業、アブラヤシのプランテーションと地形との関係などの基礎情報をえることができた。とくに、先行するオランダの NPO の取り組みはすごく参考になり、テンカワン油利用と事業化にむけてのイメージと課題が浮きぼりになったとおもわれる。



テンカワンの村へ



テンカワンの探査

まずはひさしぶりに体験する新規の国である。出張の準備期間はわずか 1 ヶ月弱であったが、いくらか新鮮な気持ちになって、いそいそとインドネシア語の勉強をはじめたりもした。そこには、ふだん慣れ親しんだ乾燥地と異なる湿潤世界の景観や動植物に接する楽しみがあり、学生時代以来で熱帯雨林関係の書籍を開いたりもした。



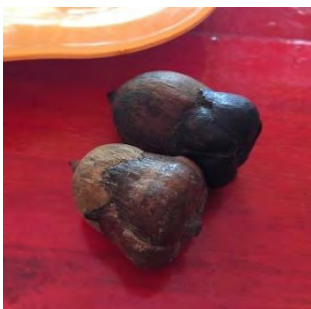
アブラヤシの林



アブラヤシの実



テンカワンの大木



テンカワンの実

テンカワン油の利用と事業化については、総論から各論へとより具体的・個別的な方向で議論が深まりつつあり、今後いっそうの進展が期待される。筆者個人に関していえば、今回のインドネシア行にはテンポラリーなかたちでぶらりと参加するかたちになったが、熱帯雨林の新たな知見や視点を獲得する貴重な機会となった。乾燥地とはなれた熱帯雨林の世界の動向についても注視していきたい。(2017年11月 古賀)